

ある人年來の友達ありて、相次ぎ亭主なくなしてよりは家近き便りにしばしば訪ね交はしつつ、子うまごの近況世の移りゆく有り様などあひ語らひてありけるに、いかなるにかもとより體華奢なる人の、この頃はいとど細くなりまさりてもの言ひ力なく常に疲れ易きやうなるを、例の夏弱き人の今年は梅雨の内にダウンしけるかとあはれがり、少しも精の附くべくと好物拵へ雨脚繁く通ひては、鱚の生姜煮茗荷の卵とち卓上狭しと並べて見するに、おぎなりの禮のみ言ひてタソパーの中身見向きもせぬを、昔はさばかり好みたりしを友達甲斐に少しは摘まみたまへとせめて目の前に廣げ、我も一口味見しつつさりや我ながら上出来美味し美味しといみじく氣を引けども、今は滿腹にてえ食はずやとべしやんこの腹さすりて見するも苦しげに弱々しく、かかることこれまでなかりしをどこぞ具合の悪きにや、病者が如く瘦せ衰へてと心盡くしに悲しく覺ゆ。

子供同士は小中の同級生なりしかば、藥劑師の娘う孫ども引き連れたまさかに訪ね來たるに、敦ちやん家の小母さんが事とてこの頃の有り様語るに、よろしからぬ御事かなと眉をひそめて、單なる夏瘦せにはあらざるをかかる時期には俄かに體調崩さるる方々多かり、一度醫者に見せたまふべくなむと言ひ置きて歸る、さればよと思ひて急ぎ醫者へ連れて行くに特別なる検査必要とてすぐさま紹介狀持たされ、なほ遠き病院検査検査と盪回しに、さらぬだに氣分優れぬ人の半ばベンチに倒れ伏しぬべきを傍らにて勵ましつやうやう診察終へてけるに、検査結果ただ事ならずと單身赴任の長男は勿論國際結婚にて久しき末の娘まで地球の裏側から呼び戻されて、醫師より癌の末期と告げらるる、耳には聞けども定かには思ひ得難く夢うつつとも辿られず、などてかかりけるまで放置したりけむ子供四人もありながらと罵り合ひ詰り合ふ聲ひと家に滿ちたり。

入院か同居かともあれ子の一人は残りてとかくの世話すべきを、さていづれか犠牲になるべきと纏るに纏るる隣の家族會議、いかになりにけむと心もとなく過ぐすにあなたより電話あり、かまへて傳へまほしき事のあれば御序でに寄りたまへ、子らは皆昨日の内に歸してき、あまり五月蠅ければと笑ふ聲の懐かしきを、さらば遠慮なくと受話器置くまま煮かけの南瓜火を止めエプロン外して出でてけり。

病者の有り様いかにと見るに、今日は些か氣分よろしとみづから茶を淹れ足どりよろぼはしながら新香の皿まで添へて、かくご足勞願ひしは餘命短き人の願ひ一つ叶へたまふまじくやと聞こえまほしきことの侍りてなむ、まことはかかること身内以外に頼むべきことかはと幾度も思ひ返しつつ、なほこれまでの御交情思ふに御身を置きてうち出づべき人なく、またあれこれ思ひ回すべき時間もなければまよ受けられずともその時はその時、駄目もとにてまづ試みむと思ひなりにてぞ侍るやと、口調重々しく切り出だすまでの前置き長し。

何事ぞ改まりて、餘命なんど禍々しきことのためふものかな、さまで見込まれたる上はいかなる御望みなりとも受け引ききこえずはあらじなとせめて明るく返せば彼もうち笑みて、不思議やな餘命しかじかと告げられつるに我ながらさしも取り亂さず、天國にはかなしき初孫の一歳にも滿たで召されしがあれば再びあひ見むことのみ急がる心地するを、この上の治療も延命も望まずただ自然の理のまま朽ち失せなむと思ふものから、ただ閉ぢ目近き身と思ひなすにこの年頃はかな事にとり紛れつつ、いづれいづれと宛てなく先伸ばしにして越し事どもの今はとなりて心にかからぬがなきにしもあらぬ内に、これなむ今生

の名残にいま一度叶へまほしくいかでと日毎に思ひ増すことの侍るやと楊枝を置いて皿を遠ざけ、これ見たまへとさし出だす紙一枚、取りて見れば國寶阿修羅展とあり、ひと年上野にて開催の砌のチラシ半世紀ぶりの東京開催とて連日報道を賑はせ、この佛像目當てに長蛇の列二時間待ちとか三時間待ちとか聞こえしに恐れをなして、見たき心はありながらさる混雑にし遭はでもこの先幾らも機會はあるべしと聞き過ぐしてけるが今ぞ悔しき、命といふもののかくはかなかりけるものを、今更に多くは望まねど昔奈良の寺にてほの見しよりこの阿修羅像には取り分けたる思ひ入れあり、いつかまたあひ見るこののあらむやと、今年こそは今年こそはとカレンダー廣げて心巡らさぬ日のなかりしを、不治の病と聞きてしからにその願ひいや増しに増さりて今ひと度逢ふよしもがなと寝ても覺めてもこのことのみ思ひ續けて侍りとうち涙ぐみぬ。

その日家に歸りて娘に電話し、かの人に奈良旅行の附き添ひ頼まれつること語るに思ひの外聲音平靜にて、末期と言はるる人々も内實は様々にて藥攜帶し海外まで行かるる患者さんもあればさしもいみじかるべきことにあらじ、ただ御身内の人々の思はむところもありよくよく思ひ諮りて御返事したまへと言ふ、御身内の人々として子らには口入れせさせじと返す返す言ひつるものを、心一つにいかにせましと夜ひと夜迷ひ明かして、なほ行く末短かるべき人のこのことのみはとせちに願ひ出でし心ばへのあはれに思ほゆれば、朝まだき彼に電話し昨日の御頼み事確かに承りぬといらへてける、受話器越し喜びの聲ただ思ひ遣るべし。

久方ぶりの友達旅行、常ならば心淨き立ち如何なるお洒落せむ帽子鞆新調すべしやなんどはかな事言ひ言ひて待ち遠にすべきを、かかる病者と連れだちて、慣れぬ旅先にてとやあらむかくやならむとさは言へど心臆しつつ思ひ弱りぬべきを、かの人もほのぼの見知るにやひと日スーパ―にて行き遭ひしまま肩並べて歸るに、我が事にて様々御迷惑御心勞かたじけなしやなど心苦しげに言ふ、うち萎れたる様見るだに悲しくて、大丈夫大丈夫ともあれ言葉通ずる國內なれば如何やうにもなるべし、心丈夫にをとレジ袋振り回して必死のから元氣我ながら白々し。

道の邊の青田夕風にうちそよぐを眺めつつ、さりともこの猛暑過ぐして出で立たむな、さかし九月の末ばかりにや紅葉の頃は混雑こよなかるべきを少しも空きたる程に行きたやな、されど紅葉の頃も捨て難しかし同じく行くとならば京都まで足伸ばして嵯峨野など見まほしくも思ふぞや、慾張り慾張り御身はまた行く機會はありぬべきをと笑ひ事に紛らはしながら、病者の弱く悲しげなるを見るに胸痛く覺えて、少しも涼しくならばこの人連れて奈良にも京都にも訪ね行かむ、いざとならば救急車呼びて同乗しなば濟むべきことと腹を据ゑ、その日に備へ攜帶電話用意し家庭の醫學と首つびきの毎日、藥局勤めの娘も全面協力すべし頑張れ頑張れと言ひおこせたるに力を得て、九月のその日を指折り數へやうその頃待ち出でたるに、儂きは人の世かくかくと告げられし餘命の半分も生きずして、初戀の佛像見たしの願ひ叶はず病者は歸らぬ人となりけり。

延命無用と言ひてしままに、入院もせず往診も拒みて日々刻々と命のともし火の細りゆくばかりを、何ゆゑ藥すら飲み給はぬ今ひと度元氣になり給へ旅行も延び延びになりたるをと枕元に囁けば、たゆげなる眼差し向けて微かにうち頷くものから數日食事も絶え聲も掠れて、今はただ天國の孫に會ひたやと息の下に言ふ、勝手なることのためふものかなこの旅行誰が言ひ初めし事なるぞ、言ひ出しつべの責任取りたまへかすと詰りながらも涙とどめ難かりけり。

奈良へと 契りし秋は 過ぎにけり 涼しくなればと 語りしものを

阿修羅像 守り給へと 花圍む 桐の棺に 寫真添へけり